

校長室だより～和光高校OB列伝 第6号 H28.6.7

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 達

5月に行われた西部地区インターハイ予選で、女子バスケットボール部が1回戦を勝ち抜いた。たかが1回戦と言うなかれ、部としては十数年ぶり、そしてヘッドコーチの加藤詩織教諭にとっては教員人生初めてとなる貴重な一勝であった。その記念すべき日を祝うために私は南青山に向かう。あるお店でケーキを買い求めるためである。

結婚式や誕生日など人生の節目に訪れる記念すべき日をケーキでお祝いする。そしてそのケーキ自体が見た目も美味しさも記憶に残るものでありたい。名前のおりこのようなコンセプトで1990年に目黒の地に創業されたのが*Anniversary*、そしてそのオーナーシェフが、和光高校3期生の本橋雅人さんである。

高校時代の本橋さんはラグビー部のウィングとして大活躍する。当時の様子をラグビー部の後輩たちは次のように語ってくれた。

**「本橋さんは快足の左ウィングとしてトライを重ねていました。フランカーの私は攻撃時にサポートをする役割でしたが速さと独特の横のステップについていくのにとっても苦労したことを記憶しています。高校日本代表候補にも選ばれるなど、すごい先輩たちの中でも一際輝いていました」**高橋正さん（4期生・現西武台高校教諭）

**「温和でとても優しい先輩でした。バイスキャプテンとバックスリーダーを務めており、試合ではトライを量産していました。自分たちが1年生の時のエースプレーヤーであり本当に頼もしい先輩でした」**大熊孝雄さん（5期生・現開智高校教諭）



3期生卒業アルバムより（1977年）

『もっとしっかり声を出せ』と真剣に怒られたことを覚えています。自分にもチームにも

**厳しい先輩でした。私はフォワードだったので直接教えて頂くことは少なかったのですが、相手を置き去りにする快足プレーにはみんなで憧れていました。おそらく50m5秒台のスピードだったと思います」**岡野義彦さん（5期生・現富士見高校教諭）

など称賛の言葉が連なる。これらを受けて本橋さんが懐かしそうにラグビー部の思い出を話してくださった。

「大和中学校出身でしたので迷わず和光高校を選びました。団体競技に憧れていたのも強豪ラグビー部に入りました。足の速さを買われたのかルールも知らないうちから試合に出してもらいました。しかし「ボールをもらったら走れ！そしてトライしろ！」この指示を忠実に守っていたので、トライか脳震盪のどちらかの繰り返しでした。学校の往き帰りの道は小石をマーカーに見立てステップを刻みながら通う事もありました。遠征費を稼ぐための練習後のアルバイトは大変でしたが、ラグビーを中心とした本当に充実した高校生活を過ごしていました。一学年上の主将榎本実さんの後ろ姿を追いかけながら厳しい練習に耐えて力を付けてきましたが、花園の予選に敗れ恩に報いることができず申し訳ない気持ちで一杯でした。新チームではバイスキャプテンとなり自分たちの代こそ全国大会に行こうと頑張っていました、一つの転機が訪れました。」

和光高校ラグビー部は夏に山中湖で合宿をするのが恒例であった。しかも対戦相手は高校生ではなく、吉田先生の後輩である筑波大学か自衛隊チーム。ウィングとしてチームに入っていた本橋さんは、みんなで活かしたボールを抱えトライを取るのが仕事、当然相手のマークはきつくなり猛烈なタックルを浴びる。倒れた後にスパイクで頭を踏まれ、やかんの水で気が付いたら記憶が抜けていたとか今では信じられないエピソードが満載である。その中でバックスでペアを組んでいた榎本実（2期生）さんとの絆は深まっていく。

「3年になり高校日本代表の候補に選ばれ、セレクションに参加することとなりました。ところが同時に応募していたブラジルへの留学試験に合格することができ、両者の夏休みの日程が重なってしまったのです。結果将来は就職し、ラグビーは高校までと決めていたこともあって「留学」を選びました。昭和51年（1976年）当時の海外は現在とは全く異なります。まして地球の裏側にあるブラジルでしたのでたどり着くまでも大変な苦勞でした。経由地のニューヨークの人種差別や対照的なブラジル各地での日系人の方々の温かい歓迎とそれまでの開拓者としての苦勞話、未開のアマゾン川流域の探検などは高校生の自分に広い視野と改めて日本について考える機会を与えてくれました。そして何よりも行程を共にした日本中から選ばれた25人の絆が深まりとても良い体験となりました。」

一回りも二回りも成長した本橋さんは花園を目指す最後の戦いの日を迎える。そして運命の準決勝。50点以上の差をつけて勝っていた朝霞高校がその相手である。雨中の戦い、

泥まみれのグラウンドはそれまでの両チームの優劣を消してしまった。朝霞の戦術は和光のバック스에球を回させないこと一点。ウィングの本橋さんまでボールがつかない。そしてまさかの敗戦。何もできなかったこの試合は今でも胸に深く刻まれている。悔いばかり残るこの試合は吉田先生への申し訳なさも合わせ何度も夢に出てくるようだ。

「進路については担任であった久保田先生と相談しました。結果県内の洋菓子店を勧められ勤めることになるのですが「お菓子」を選んだ理由がありました。それはアルバイトでお寿司屋さんで働いていたことから「食べ物の製造」という漠然とした希望の中で、「ケーキはお祝いや楽しい時に食べるものだ」という今に連なるこだわりを潜在的に有していたのです。「いつかはケーキで世の中を幸せにする」という夢がこの時にできたのです。朝暗いうちから夜遅くまで働く毎日でしたが辛いと感じたことは全くありません。高校時代のラグビーで鍛えた心と身体はこの後も私自身を支えてくれるのです。」



前列左が久保田敢司先生、右から二人目が本橋さん

ケーキ作りをしていく中で「東京」でなければだめだという気持ちから、原宿のお店に移る。そして独立して自分の店を持つと考えた時に有名な世紀の婚礼をテレビで見る。英国皇太子チャールズとダイアナの結婚式であった。1981年の夏、働き始めて4年目のことであった。この時に見た豪華なウェディングケーキこそ **Anniversary** の原点であった。

「どうしてもイギリスに行かなければと思いました。紹介していただく方がいらっしゃりまずはロンドンに向かいました。そしてそこから伝手をたどってマンチェスターへ。ここでは3か月という期間を切られ師となるパテシェ・ネーディンハーストさんのお宅で修業をしたのです。最初に問われたのは『まっすぐな線を引くことができるか』という問いでした。既に経験を積んだ私にとって簡単な作業。と思ったら大きな誤り。重ねてその上からもう一本線を引く。これを10回繰り返すと正しくない線は崩れる。この単調な作業からイギリスでの修業が始まったのです。寝る間も惜しんで必死に頑張りました。こうしてたどり着いたのが自分らしいケーキ、それが現在のウェディングケーキの出発点です。」(つづく)